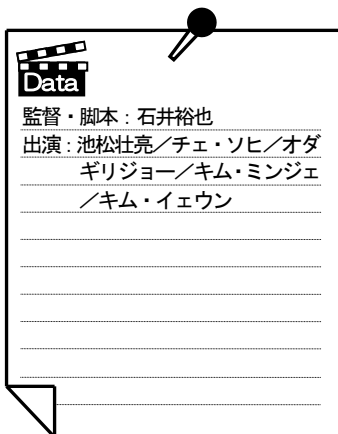




■■■ショートコメント■■■

◆石井裕也監督の最新作として、『茜色に焼かれる』（21年）と本作がほぼ同時に公開された。『茜色に焼かれる』は尾野真千子主演による母と子の、かなり“変わった物語”だったが、韓国を舞台に、池松壮亮、オダギリジョーと韓国のスターを混在させた本作も、かなり“変わった（ぶっ飛んだ？）物語”だ。

私は石井監督の商業デビュー作たる『川の底からこんにちは』（09年）（『シネマ25』164頁）の奇妙なタイトル、奇妙な物語、そして、ヒロイン満島ひかりの魅力にぞっこんだったが、以後の作品は少し平凡。しかし、奇妙なタイトルの本作は必見！そう思ったが・・・。

◆石井監督自身は裸になって韓国映画界に飛び込み、韓国スタッフと一緒に仕事をする中でさまざまなものを見つけたそうだから、本作はきっと、日韓関係が最悪になっている今、そんな体験を本作のテーマとタイトルに込めたもの！きっとそうだろうが、私にはそもそも妻を病気で亡くした弟の青木剛（池松壮亮）が、1人息子の学（佐藤凌）を連れて、韓国で怪しげな商売を営んでいる兄、透（オダギリジョー）の元に飛び込むという設定が納得できない。いくら兄から調子のいい言葉で韓国行きを勧められたとしても、兄の性格や生き方のいい加減さを誰よりも熟知している弟なら、それが洒落だということくらいわかるのでは？

また、剛は腐っても（？）小説家なのだから、妻が死亡したからといって、日本の家を売り払うという一大決心をしてまで、あえて言葉も通じない韓国での父子の生活を選択する必要など、ないのでは？

◆他方、かつてのアイドル歌手チェ・ソル（チェ・ソヒ）と剛との“出会い”も不自然だ。剛はある日、客のいない中でライブをしている元アイドル歌手であるソルと目が合ったようだが、その後、本作ではクッパ食堂で1人泣きながら酒を飲んでいるソルとの、言葉が

通じないままワケの分からない展開の“出会い”が描かれていく。しかし、これって漫画・・・？

いやいや、これがれっきとした本作のテーマであり、ロミオとジュリエット風の恋物語の出発点になっていくから、アレレ。「言葉が通じないけど、悲しみの目は分かる」というのがいかにも小説家らしい剛の“言い分”だが、後に2人は“それなり”の英語で“それなり”の会話を交わしているから、会話を欲するのなら英語で喋ればいいだけだ。こりゃ一体ナニ？

◆商売上の相棒に騙された透は、剛から責められる中、新たに「ワカメの輸出で儲ける」と宣言し、2人は海辺にある江陵（カンヌン）を目指すことに。

他方、兄のジョンウ（キム・ミンジェ）の勧めで、妹のボム（キム・イエウン）と共に列車に乗って江原道に向かっていたのがソル様御一行3名。彼らが目指すのは、江原道にある母親のお墓参りだが、そんな日韓の“はぐれ者”同士を結び付けるのが、剛の息子、学だ。しかし、そのストーリーもいただけない。おもそも、9歳になる学が、なぜ列車の中で迷子になるの？また、通路で1人で歩いているだけで、なぜ彼が迷子だとわかるの？

本作のテーマは、透が語る「韓国では、メクチュ チュセヨ（ビールください）とサランヘヨ（愛しています）だけ話せばいいんだ」ということらしい。それはそれでいいのだが、ロミオとジュリエットの出会いを描く脚本には、それなりの必然性がなければ・・・。

◆本作は128分と結構長い。また、本作の最後に登場してくる、何ともダサい(?)“アジアの天使”(芹澤興人)の姿にもビックリだが、本作がそんな長尺になっているのは、あまりにもくだらないエピソードを詰め込み過ぎているからだ。

日韓両国の相互理解はあり得ない。したがって、妹ソルと剛の恋模様もあり得ない、そう断言していたジョンウだったが、そんな兄妹たち御一行と透・剛兄弟が、心の交流を始めるのは、ソルを追ってきたプロダクション社長との“対決”。しかし、このエピソードもかなりバカバカしい。

また、お墓に向かう車にガソリンを補給した際の、ラジエーター修理の要否や、お墓参りの際にソルのお腹が痛くなり、病院に担ぎ込まれるエピソードも、全く意味が分からない。そもそも、携帯も通じない山の中で、車もエンストした状況下、一体どうやってソルを病院に連れて行ったの？また、病院代は？そこで私は、ひょっとしてこれは、ソルが社長の子供を妊娠したのでは？そんなゲスの勘繰り(?)をしてしまったが、結局単なるストレスだったとは何なの？その他、本作の脚本には？？？

◆韓国のお墓がなぜあんな山の上にポツリと1つだけあるのかは知らないが、とにかくジョンウとボム兄妹のお墓参りが無事に終われば、何らかの恋模様を期待してソル様御一行に同行しただけの透・剛兄弟の珍道中もおしまい。そして、本作もこれにてジ・エンド。多くの観客がそう思ったはずだが、そこで突如、近くにあるソルの叔母さんの家に泊まることになるからアレレ。しかも、そこには美しいソルの従妹テヨン（チャン・ヒリョン）

がおり、叔母さんとテヨンは久しぶりに会ったソルやジョンウとボム兄妹を大歓迎してくれたからさらにアレレ。これなら、最初からここにきて、叔母さんやテヨンたちと一緒に
お墓参りをすればいいのでは・・・？

さらにハチャメチャなのは、ここでテヨンに一目ぼれしたらしい透が「俺はもういいから、お前、ソルに告白しろ」と、例の「メクチュ チュセヨ」と「サランヘヨ」とけしかけたことだ。その言葉に励まされた（？）剛は、いつものように1人で待っている（？）ソルに口説きの言葉をかけるわけだが、ここまで同じことを何度もやられると、いい加減うんざり。

もともと、そこで2人を結び付けるのがお互いのエンジェル（天使）で、それが本作のテーマになっているから、それはしっかり注目しておく必要がある。その後、またワケの分からない学失踪劇（？）を経て、今度はソルの失踪（？）。しかして、1人で浜辺に座るソルがそこで見たものは？なるほど、これが“アジアの天使”なの？私の目にはその姿かたちは最悪に見えたが・・・。

2021（令和3）年7月7日記